

チリ地震津波と南三陸町 1960年の教訓は活かされたのか



▲1960（昭和35）年5月24日 志津川地区五日町付近

1960（昭和35）年5月24日、日本に津波が襲いかかった。日本では地震は観測されていない。チリ南部で発生した推定マグニチュード9.5の巨大地震によって起こった津波が、平均時速750kmという速さで太平洋を横断し、22時間半後に日本沿岸に到達したのである。南三陸町は約5.5mの津波に襲われ、41人が犠牲になった。旧志津川町の中心部でも多くの建物が流失し、役場の建物は2.4m浸水した。

その教訓をもとに、町は高さ5.5mの防潮堤を整備し、チリ地震津波で浸水した高さを示す標識や避難誘導サインを設置してハザードマップを整備。各地区で避難訓練を実施するなど、防災意識の向上に努めてきた。また、1995年には本庁舎の隣に、防災対策庁舎を建設。阪神淡路大震災を教訓に震度7の揺れに耐えられる鉄骨構造としていた。

宮城県沖地震について2004年の県の被害想定では、到達する津波の高さは最大6.7mとされていたのである。東日本大震災では、最初に出された大津波警報は6mだった。その警報が10m以上に更新されたのは、南三陸町に津波が到達したと見られる15時25分のわずか10分程前だった。実際に町を襲った津波の高さは平均で16.5m。全指定避難場所・指定避難所78カ所のうち34カ所が被災する結果となった。

「想定外」や「未曾有の災害」という表現は、自然災害には決して当てはまらない。貞観地震や明治三陸津波などの大津波は過去に幾度も繰り返されているという事実を私たちは思い知った。人間の想定をはるかに上回るのが自然災害である。

「最悪に備えて最善を尽くせ」それが私たちが得た命を守るための教訓だ。